

昭和30年代のホテル建築の特徴について

On the characteristics of Japanese hotel architecture in the 1950s and 1960s

河村 英和
Ewa KAWAMURA

要 旨

1951年に連合国の占領から解放された日本では、高度経済成長によるレジャーブームで、旅館の新築が温泉地を中心に50年代に相次いだ。モダニズム建築のホテル建設ラッシュが各地で起こるのは、1964年の東京オリンピックを目前にする60年代前半で、ホテル関連雑誌や書籍の刊行も急増した。ホテルの内装のために一流の芸術家たちが起用され、大規模な壁面装飾が流行した。工芸タイルやモザイクレリーフ、巨大壁画が多用され、ジャパニーズ・モダンという潮流を築いたデザイナー家具が発展した。ホテル意匠に和の伝統モチーフが取り入れられることもあれば、ポップな原色主体のカラフルな色彩感覚で、アポロ計画の影響によるスペイシーな宇宙趣味が反映されたデザインも同時に好まれた。展望レストラン・スカイルームが設置されるようになるのもこの時代の傾向であった。以上、1950-60年代の建築雑誌に紹介された事例をもとに、当時のホテル建築の特徴を分類・概観・検証する。

キーワード：昭和30年代、ホテル、旅館、モダニズム建築、1964年東京オリンピック

1. はじめに

第二次世界大戦で敗けた日本は1951年に連合国の占領から解放され、高度経済成長期に入ると、国民が余暇を求めるようになった。温泉地を中心に旅館・ホテルが増加し、山岳地帯など新たな観光・リゾート地開発も進んでゆく。そのような状況下で1959年に、1964年東京オリンピックの開催が決まり、1960年代前半は都内のみならず日本各地でモダニズム建築のホテル建設ラッシュが巻き起こった。さらに1970年の大阪万博への期待も高まり、1970年代初頭までホテルの

建築・デザインが飛躍的に進化してゆくが、それは今、東京2020オリンピックと大阪のExpo2025を通じて、日本のホテル建築・デザインが急速に洗練化されている昨今の状況とも類似しており、改めて今こそ1960-70年代のホテル建築を見返すべき時に来ている。本稿は、その前段階として戦後1950年代から1960年代、とくに昭和30年代に的を絞り、当時の建築雑誌で取りあげられたオリンピック開催の1964年までに新築されたホテルを抽出して、時系列順にそれらの建築デザイン・インテリアの傾向を読み取り、その時代特有の特徴を明らかにしてゆくものとする¹。そのために使用した建築雑誌は、『建築と社会』（日本建築協会、1920年創刊）、『新建築』（新建築社、1925年創刊）、『建築文化』（彰国社、1946年創刊）、『近代建築』（近代建築社、1954年創刊）、『公共建築』（公共建築協会、1958年創刊）、『インテリア：Japan interior design』（学芸書林、1960-1967年のみ）、『建築画報』（建築画報社、1965年創刊）、『SD（スペースデザイン）』（鹿島出版会、1965年創刊）であり、1950年代から1964年竣工のホテルの紹介が続く1965年までの号を閲覧した。

2. 旅館優勢の1950年代

高度経済成長に伴うレジャーブームの到来とともに、1950年代から建築雑誌では旅館特集が頻繁に組まれた。当時はまだホテルよりも新築旅館の記事のほうが優勢で、雑誌『近代建築』では、1955年7月号²、1956年4月号³、1956年12月号⁴、1957年6月号⁵、1957年11月号が旅館特集

1 昭和39年が1964年のオリンピック開催年に当たるので、本稿の表題や見出しでは「昭和30年代」と元号で記したが、1960年代後半から1970年代までのホテル建築デザインの状況も一部含みつつ、今後の課題と連動できるように、本文では主に西暦で記述した。なお、1960-70年代の日本のホテル建築についての概説には、拙稿：河村英和「1960-70年代の日本のホテル建築について」『戦後昭和の建築—その価値づけをめぐる—（2021年度日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門研究協議会資料）』、日本建築学会、2021年、pp. 93-98がある。

2 この号に収録された旅館（設計者）は、伊東の「一王」（妹尾竜三）、上狩野村の「月ヶ瀬」（古根村勝雄）、東京・千駄ヶ谷の「松岡」（日本建築匠房）と「祥平館別館」（水間建築造園事務所）、赤坂の「真珠荘」（河合工務店）、麻布の「藤」（国土計画興業KK）であり、都内の新築旅館の事例も目立つので、東京でも当時は旅館の需要が高かったことが窺える。

3 この号に収録された旅館（設計者）は、伊東の「猪戸館大浴室」（福永満八）、熱海の「富士屋ホテル」（吉江憲吉・鈴木悦郎）、湯河原の「伏見屋」（辻本重治・河合吉次郎）、東京・築地の「新小松」（石間桂造・石間宏一）、高崎の「井筒」（水原徳言）、房州・館山の「木村屋浴室」（十代田三郎・水間享之）であった。

4 この号では、鈴木如雲設計の西伊豆の5件：「三光閣」「長岡ホテル」「はなぶさ」「小川屋」「東府屋」が取りあげられた。

5 この号では、後年、高齢者施設の設計を得意とし名を馳せた木下茂徳（1924-1999）が「旅館建築について」を寄稿し、安田建設株式会社の「多津美荘」と「折鶴」、水間建築造園設計事務所の「古久屋別館」と「松緑」、近藤信夫の「はなぶさ旅館」、棚橋工務店の「山王ホテル」が紹介された。

だった⁶。『建築文化』では、1953年9月号⁷、1957年1月号⁸、1958年5月号⁹、1959年10月号で、旅館と温泉ホテルの紹介記事が多めに掲載されている¹⁰。

『近代建築』の1955年7月号に「旅館の基本計画について」を寄稿した岡田哲郎(1902-1983)は、「最近の旅館建築は、全国的に新しい傾向にむかっている。(中略)吉田五十八氏のスタイル、堀口捨己氏のスタイル、等々といった風にその模倣がはんらんしている」と¹¹、述べているものの、旅館といっても必ずしもこのような和風建築の巨匠たちが得意とする木造の数寄屋造りばかりではなく、鉄筋コンクリート造の四角い箱型のモダニズム建築の旅館が増えてきたのもこの頃の特徴である。なお岡田哲郎は、1950年代に旅館建築に精力的に取り組んだ建築家で、箱根の「武蔵野」¹²、伊東の「濤泉郷」¹³、「羽衣ホテル」¹⁴、清水の「和田」¹⁵、「竜宮館」といった作例を残しており¹⁶、井上書院が刊行したビジュアル叢書「建築デザインシリーズ」(1954-60年、全7巻)の一冊『旅館とホテル』(1956年)は彼の編纂による。しかし書名にある「ホテル」とは裏腹に、紹介されている事例が旅館建築ばかりだったのは¹⁷、旅館がホテルと称することが横行していた時代だったためである。さらに同書では大規模旅館の紹介がされていないのも、当時は「旅館としての営業許可を得るには原則として客室7室以上とし、その主室は4帖半以上」であったからだ¹⁸。

6 この号は「海浜の施設と旅館」の特集で、岡田建築設計事務所の「竜宮館」、日本観光KKの「玉荘」と「富士屋ホテル新館」が取りあげられた。

7 この号では、滝浦潤の寄稿「日本旅館とその近代化」が掲載され、福永満八の「江の島海浜ホテル」、岡田哲郎の「羽衣ホテル」、池田総一郎の「柗家旅館新館」が取りあげられた。

8 この号で紹介されたのは、柳英男の旅荘「けごん」、中村登一の旅館「みなかみ」、小木曾定彰・柴岡玄佐雄の「鳴子ホテル新館」である。

9 この号で紹介されたのは、米子の「東光園」の新浴場と離れ(柴岡玄佐雄)、伊東の「濤泉郷」(岡田哲郎)、福井県芦原の「旅館いろは」(戸田組)、熱海の「八方苑」(大成建設)、熱海富士屋ホテル(特別室、318号室、大宴会場)であった。

10 この号で紹介されたのは、柳英男の「鬼怒川温泉ホテル」、山脇巖の「ホテル白河新館」(鬼怒川温泉)と「川治温泉ホテル」、池亀暢雄の「待月楼」(鳥羽浦)である。

11 岡田哲郎「旅館の基本計画について」『近代建築』1955年7月号、p. 34.

12 岡田哲郎「温泉旅館“箱根武蔵野”」『建築文化』1952年3月号、pp. 7-14; pp. 67-72; 岡田哲郎建築設計事務所「武蔵野観光旅館」『建築文化』1955年1月号、pp. 22-23.

13 岡田哲郎建築設計事務所「温泉旅館“濤泉郷”」『建築文化』1953年1月号、pp. 1-7; pp. 57-58; 岡田哲郎建築設計事務所「濤泉郷」『建築文化』1955年1月号、p. 21; 岡田哲郎建築設計事務所「旅館・濤泉郷」『建築文化』1958年5月号、p. 42.

14 岡田哲郎建築事務所「羽衣ホテル」『建築文化』1953年9月号、pp. 20-23; p. 60.

15 岡田哲郎建築設計事務所「和田」『建築文化』1955年1月号、pp. 24-25.

16 岡田建築設計事務所「海浜の施設と旅館 竜宮館」『近代建築』1957年11月号、pp. 21-23.

17 ここで紹介された旅館は、福永満八の庵原屋(清水市)と伊東園(伊東温泉)、石川建築の大野屋(東京・蠣殻町)、中村登一の一福(箱根)、橋旅館(箱根)、明石信道の萬国屋“萬葉閣”(あつみ温泉)、中山克己の京稻旅館(東京・麴町)、大江修の天野屋(湯河原温泉)、岡田哲郎の濤泉郷(伊東温泉)と箱根武蔵野(箱根)、柳英男の旅荘けごん(東京・代々木)、仙多佳哉の松韻亭(東京・原宿)であるが、一部、逢瀬目的の連れ込み旅館も取りあげられている。

一方、彰国社から同時期に発行されたビジュアル叢書「建築写真文庫」(全145巻、1953-70年)では、旅館とホテルに関する巻は5冊に及び、その刊行はすべて1950年代に集中している。その5冊中4冊は旅館に関するもので、最初に出たのも旅館(第13巻目、1955年)で¹⁹、最後がホテル(第62巻目、1958)であり、やはり1950年代はまだホテルよりも旅館の方が需要が高かったことが窺える。この「建築写真文庫」シリーズのホテルと旅館に関する三つの巻(第13、61、65巻目)の編者である北尾春道(1896-1973)は、数寄屋建築の専門家で、最初の巻には、1950年の愛知国体(第5回国民体育大会)で昭和天皇陛下がご宿泊するため、名古屋の料亭「八勝館」に堀口捨己(1895-1984)の設計で増築された数寄屋造りの客室(建築学会賞受賞)も掲載された²⁰。旅館の巻だけでなくホテルの巻の編者にも北尾春道が選ばれたのは²¹、ホテル設計の実務経験者がまだ少なかったからであろう。かつて堀口捨己が『アルス建築大講座』(全7巻、1926-30年)のために書いた「ホテル建築」の章は、戦前の欧米のホテル建築事例の紹介に留まっているし、福永満八(生没年不明)は戦後のドイツとイタリアのホテル建築についての記事を『ホテルレビュー』(1952年11月号)に寄稿しているものの、彼もホテルではなく旅館建築を多く手掛けた建築家だった²²。

1950年代に新築されたホテルはシンプルな合理主義建築である。床材にはアスタイルやテラゾーが使用され、ときには巨大な壁画装飾が華を添えるが、天井は概して低く欧米の高級ホテルと太刀打ちできるレベルではなかった。たとえば、1952年に東京・日比谷にできた日活ホテルは、日活国際会館の上層階(6-9階)に入居したもので、下層階(2-5階)は貸し事務所で、バブル期以降に主流となったオフィスが同居する高層ビル型ホテルの先駆けともいえるが、内装はいたって素気なく唯一の装飾的要素は、公共スペースに使用される大理石素材自体のマーブル模様、一部の客室の障子の棧ぐら^{よしほる}いであろうか。外観では、屋上の一角に、パリのノートルダム大聖堂のガーゴイユさながらの黒田嘉治(1908-1984)制作の彫像が置かれたが、それでも装飾的にあまり目立ったものではなかった²³。

18 北尾春道編『建築写真文庫13：旅館の客室と宴会場』彰国社1955年、p.5.

19 この巻で紹介された旅館の客室は、大熊工務店の松岡邸(東京・千駄谷)、館主設計のつるや(熱海)、緑風閣(熱海)、青木館本館と別館(熱海)、岡田哲郎の武蔵野(箱根)、堀口捨己の八勝館(名古屋)、初瀬川松太郎・家富宏泰の大文字屋(京都)、福永満八の伊藤園(熱海)で、宴会場は、同伊藤園、鬼怒川旅館(鬼怒川温泉)、大野屋(熱海)、青木屋(熱海)、八勝館(名古屋)、一王旅館(伊東)、水風閣北条館(韭山)、つるや(熱海)である。

20 北尾春道編『建築写真文庫13：旅館の客室と宴会場』彰国社、1955年、pp.34-39. 八勝館「お部屋」<https://www.hasshoukan.com/room/>(2021年9月18日閲覧)

21 この巻で紹介されているのは東京の4件(帝国ホテル新館、ホテル国際観光、第一ホテル、東京グランドホテル)と江の島ホテル(藤沢)、2件の熱海のホテル(海上ホテル、大月ホテル)であった。

22 彼が旅館建築について書いたものには、福永満八『現代建築叢書2：旅館の建築』建設情報社、1958年；福永満八「旅館の客室のプランニングについて」『近代建築』1956年4月号、pp.30-33がある。

23 竹中工務店「日活国際会館」『新建築』1952年6月号、pp.252-227.



図1 村野藤吾設計による「志摩観光ホテル」が表紙となった『新建築』1951年7月号(左)；同村野設計の京都の「都ホテル」の新館のバルコニー部分のディテールが表紙の『新建築』1961年4月号(右)(跡見学園女子大学図書館収蔵)

戦後の建築雑誌でホテル特集が組まれた早い例は、『建築と社会』の1951年7月号で、村野藤吾(1891-1984)が設計した2件のホテル、志摩観光ホテルと名古屋のホテルマルエイが紹介された。『建築文化』誌上でホテルを取りあげた早い事例も、志摩観光ホテルの記事を掲載した号(1951年7月)だった²⁴。その次は、山下寿郎(1888-1983)設計の仙台の青木ホテル本館と²⁵、山脇巖(1898-1987)による同青木ホテル別館が紹介された1952年10月号である²⁶。『近代建築』では1955年1月号に、高橋貞太郎(1892-1970)設計の帝国ホテル新館(1953-54)が紹介されたのが初期のホテル関連記事だった。

『新建築』誌上での戦後のホテル記事では、1950年7月号に掲載された箱根の「山のホテル」(清水建設)の新築建て替えの紹介が早い例だが²⁷、表紙にホテルの外観写真が選ばれる最初の例

24 近畿日本鐵道營繕課・村野・森建築事務所「志摩観光ホテル」『建築文化』1951年7月号、pp. 8-13; pp. 31-32. この号には山脇巖の鳴子温泉の旅館「菅原館」も紹介された。山脇巖「観光旅館 鳴子温泉菅原館」『建築文化』1951年7月号、pp. 14-17.

25 山下壽郎設計事務所仙台支社「青木ホテル」『建築文化』1951年10月号、pp. 18-19. 建て替え前の青木ホテルには、1933年、日本に亡命中の建築家ブルーノ・タウトが宿泊している。

26 山脇巖「青木ホテル別館」『建築文化』1952年10月号、pp. 19-21.

27 清水建設 KK 設計部「山のホテル」『新建築』1950年7月号、pp. 191-195.

も、1951年7月号の志摩観光ホテルの紹介時であった(図1:左)。また、1952年6月号の巻頭カラーで、洋画家、酒見恒平(1910-1990)の油彩「日活ホテルの外観」が掲載されたのも、『新建築』誌上でホテルが注目されたことを明かす初期の例だろう²⁸。

3. 新築ホテル需要高まる 1960年代

最新鋭のデザインでホテルを建てる需要は、海外からの旅行者の増加と連動していた。羽田の東京飛行場(1931年開港)は1951年までGHQの占領下にあったが、1952年に東京国際空港と改名し、日本航空(1951年創業)によって1954年、初の国際線となる東京＝ホノルル＝サンフランシスコ線が運行した。1960年、初のジェット旅客機「ダグラス DC-8」型の就航で飛行時間が短縮され、そんななか日本航空によって、空をイメージしたかのようなコバルト色の外壁の「ホテル日航」(後述)が銀座に誕生した。1961年にはヨーロッパ線も就航し²⁹、日本を訪れる外国人客が増えてゆく。1962年に建築家の柴田陽三(1927-2003)が、ホテルを専門とする建設会社「観光企画設計社(KKS)」を創設させたのも象徴的だ。日本のゼネコンが海外のホテルを請け負うようになるのもその頃からで、1959-62年、大成建設はジャカルタに、アジア・オリンピック大会(第4回アジア競技大会)の宿泊需要に向け、インドネシア最大のホテルインドネシア Hotel Indonesia(アベル・R・ソーレンセン Abel R. Sorensen 設計)を施工した³⁰。このホテルはその歴史的建築価値が認められ、1993年に文化財に登録されている。

1964年の東京オリンピックに向け、国内でのホテル建設・開業ラッシュは加速する。1963年、日本初の外資系ホテルとなる東京ヒルトンホテル(増田誠一、吉田五十八、久米権五郎、山内誠二設計)が永田町に建設されたのも³¹、オリンピック需要を狙ったものだった。

1964年4月に日本人の海外渡航が自由化し、10月のオリンピック開会式目前となった9月には浜松町からモノレールが開通するため、8月には羽田国際空港内に羽田東急ホテル(東急不動産)が開業した³²。その隣りには羽田プリンスホテルも同年中に開業している。

28 竹中工務店「日活国際会館」『新建築』1952年6月号、p. 1.

29 日本航空「JALの沿革」<https://www.jal.com/ja/outline/history.html> (2021年9月20日閲覧)

30 ソーレンセンは、インドネシアの国営の建設会社「国民住宅公社 NHDC (National Housing Development Corporation)」に所属していたアメリカの建築家であり、現地の気候を熟知していたので、来日して設計を行った。内部装飾は、インドネシア人芸術家が起用され、レリーフやモザイク壁画で飾られた。現在はドイツのホテルチェーン、ケンピンスキーの傘下となっている。A.R. ソーレンセン・大成建設設計部「計画案：インドネシアホテル」『新建築』1960年5月号、pp. 44-46；A・ソーレンセン・大成建設設計部「ホテルインドネシア」『新建築』1963年1月号、p. 93.

31 後年、東急の運営に変わり「キャピトル東急ホテル」と改名され、この永田町にあった日本初のヒルトンホテルの建物は2006年に解体された。

規模が大きければ「グランドホテル」、眺望が良ければ「ビューホテル」という名のホテルが急増するのも1950年後半から1960年代の傾向で、戦前からあった「観光」や「国際」といった接頭辞のある屋号も増えていった。また山岳地が「高原」という接尾辞を付けた地名で呼ばれるようになったので、該当する地には「高原」と名の付くホテルもできた³³。温泉町では既存の木造旅館をRC造に建て替えてホテル化するようになり、そのさいホテル名に「ニュー」を付けて改名することもよく行われた。「ホテルニュー」という接頭辞のある屋号でも、客室はまだ和室が主流で、旅館とホテルを融合させた「リョテル」という言葉が使用されたのもこの時期だった³⁴。

ホテルや旅館の専門誌が創刊されるのも1960年代に多く、『近代旅館』（1962-68年、国際観光設備協会）、『ホテルと旅館』（1964-65年、同友館）、『月刊ホテル旅館』（1964年～現在、柴田書店）、『近代ホテル旅館』（1969-71年、近代旅館新社）など、なかにはオリンピック開催年の1964年に創刊したものもある。1960年代は各分野の関連誌でホテルの紹介が急増したが、建築雑誌によってはホテルをあまり扱っていないものもあった。『公共建築』では、1960年3月号で帝国ホテルの社長、犬丸徹三（1887-1981）が、「ホテルも公共建築」と題するインタビューを受けているものの³⁵、『公共建築』誌でその後1960年代に掲載されたホテル記事は、1964年4月号のホテルニューオータニの新築についてのみだった³⁶。『建築』誌上では、新築ホテルの記事は1968年以降からで、東京オリンピック前に建設されたホテル・旅館の記事はほとんど掲載されなかった。

本格的なホテル特集が組まれたのは、『建築文化』の1962年3月号で、都内の2大高級ホテル「パレスホテル」と「ホテルオークラ」、丹下健三（1913-2005）設計のホテル「熱海ガーデン」が紹介されたときであろう³⁷。やはり大々的なホテル特集が出たのはオリンピック開催年で、『建築と社会』（1964年4月号）と『新建築』（1964年11月号）がそれに相当する。

『建築と社会』は、発行元の日本建築協会が大阪にあるため、関西のホテルの紹介が多い。宝塚ホテル新館（1961-62、竹中工務店）、六甲山ホテル新館（1961-62、竹中工務店、2020年解体）、倉敷国際ホテル（1962-63、倉敷建築研究所）、琵琶湖のホテル紅葉（1962-63、海上静一、2013年解体）、神戸ニューポートホテル（1962-64、日建設計、1990年代解体）というラインナップで、

32 この空港ホテルは、地方の客に配慮するため和室の客室も用意していて、当時はまだホテルという名前でホテルらしい外観でも、和室を提供するホテルが後を絶たなかった。

33 『新建築』では「美ヶ原高原ホテル」（1963年3月号）、「霧島高原ホテル・ヒュッテ」（1959年8月号）とその「別館」（1963年5月号）が紹介された。

34 長谷政弘編『観光学辞典』同文館出版、1997年、p. 150; 富田昭次『ホテルの社会史』青弓社、2006年、pp. 124-125。

35 犬丸徹三「対談・ホテルも公共建築」『公共建築』1960年3月号、pp. 12-17。

36 吉成武「〈ホテル東京オータニ〉の設計とその問題点」『公共建築』1964年4月号、pp. 65-67。

37 丹下健三計画研究室「ホテル・熱海ガーデン」『建築文化』1962年3月号、pp. 47-56。またこの号では、オリンピック前のさらなるホテル需要の参考として、海外の2つの事例（ピッツバーグの「ヒルトン」とモントリオールの「クイーン・エリザベス」）も紹介された。



図2 村野藤吾設計による名古屋都ホテルの外観（開業当時の絵葉書より、筆者蔵）

続く『新建築』の同年のホテル特集で取りあげられた関西のホテルとも被っていない。

1964年の『新建築』11月号で紹介されたホテルは、すべて10月開幕のオリンピックまでに竣工されたホテルで、東京のものでは、帝国ホテル新館（1955、高橋貞太郎、1980年解体）、第一ホテル新館（1958-60、清水建設）、銀座日航ホテル（1958-59、芦原義信）、ホテルニュージャパン（1958-60、佐藤武夫）、銀座東急ホテル（1960、東急不動産・久米建築事務所）、パレスホテル（1960-61、竹中工務店）、ホテルオークラ（1960-62、大成建設）、東京ヒルトンホテル（1961-63、久米建築事務所）、ホテルニューオータニ（1963-64、大成建設）、東京プリンスホテル（1963-64、竹中工務店）が紹介された。関西のホテルでは、京都国際ホテル（1960-61、吉村順三）、名古屋都ホテル（1962-63、村野・森建築事務所）、大阪の新阪急ホテル（1963-64、竹中工務店）、神戸のオリエンタルホテル（1963-64、竹中工務店）、札幌のローヤルホテル（1962-64、観光企画設計社）とホテル三愛（1962-64、ホテル三愛設計部・坂倉準三建築研究所・大成建設）の概要が掲載された³⁸。

どのホテルの外観も似たようなものが多いなか、村野藤吾設計の名古屋都ホテル（1961-63年築、2000年解体）の意匠は例外的に異彩を放っていた（図2）。というのも1950-60年代、丹下健三、黒川紀章、菊竹清訓といった建築界の巨匠たちが傾倒していたのは、建築は細胞分裂で増殖し常に新陳代謝されると解釈する「メタボリズム Metabolism」思想で、それが名古屋都ホテル

38 「日本の都市ホテル16」『新建築』1964年11月号、pp. 180-198.

のアルミ製の突出した窓枠が繰り返されるリズムカルな配置に呼応していたからだ。このホテルでもそうであるように、窓の角がアールに湾曲しているデザインも 1960 年代の建築によく見られる傾向で、メタポリズム思想と連動する有機性に関わっている。

オリンピック終了後、翌 1965 年の建築雑誌でも、オリンピック前に開業したホテルの記事がまだ時折掲載されていた。『SD (スペースデザイン)』の創刊号である 1965 年 1 月号で紹介されたのは、すべてオリンピック目前に開業したホテルで、東京プリンスホテル (1963-64、竹中工務店)、川崎日航ホテル (1963-64、芦原義信)、新阪急ホテル (1963-64、竹中工務店)、神戸のオリエンタルホテル (1963-64、竹中工務店)、姫路新大阪ホテル (1963-64、日建設計)、札幌のホテル三愛 (1962-64、現・札幌パークホテル、坂倉準三ら)、札幌ローヤルホテル (1962-64、観光企画設計社) であった。『SD』では定期的に一連の新築ホテルの概要が紹介されていて、1965 年 9 月号で取り上げられたホテルで、オリンピック前までに建ったものは、山梨・山中湖のホテル・マウント富士 (1962-63、吉江憲吉)³⁹、清水の三保園ホテル (1963-64、田中忠雄)、高松国際ホテル (1963-64、竹中工務店)、アサマ・モーターロッジ (1963-64、海老原建築設計事務所) である⁴⁰。なおオリンピックの開会式当日の 10 月 10 日に新規開業したホテルに⁴¹、菊竹清訓設計の東光園 (鳥取県米子市皆生温泉) がある⁴²。東光園はもともと低層階の木造旅館であったが、オリンピック開催に向け、全日空の羽田＝米子便が開通し皆生温泉の発展が見込まれたことから、RC 造で新築となったのだ。

つまりオリンピック効果によるホテルの新築ラッシュは、東京、京都、大阪のような大都市だけでなく地方でも起こっていた。建築雑誌・書籍で紹介される事例がとくに多かったのは熱海である。そのなかでもとくに奇抜で大規模な事例が、熱海の景勝地、錦ヶ浦の断崖に建つホテルの計画 (1960) で、『新建築』に掲載された⁴³。建物が地形の形状に合わせ、巨大なピロティの柱が林立したスペース・ストラクチャーであったが、設計者の岡田新一 (1928-2014) のプランは実現することなく、後年、地元の建築家、稲葉長司の設計 (清水建設施工) によってホテルニューアカオ (1972-73、2021 年本館のみ閉館) が建設された⁴⁴。

39 このホテルの計画はすでに『新建築』の 1962 年 4 月号で発表されていた。吉江憲吉設計事務所「山中湖ホテル計画案」『新建築』1962 年 4 月号、p. 151.

40 オリンピック以降にできたホテルでこのコーナーで紹介されたのは、草津温泉のホテル・サンバレー (1963-65、平松建築設計事務所)、鴨川グランドホテル (1964-65、翼建築設計事務所)、鬼首高原荘 (1964、円堂建築設計事務所) 長島温泉のグランSPA (1964、竹中工務店) であった。

41 稲葉なおと『夢のホテルのつくりかた』エクスタレッジ、2021 年、p. 221.

42 戦後のホテル建築で唯一、登録有形文化財 (第 31-0231 号、2017 年) となった建造物だが、同じく菊竹設計の新館増築部分 (1973) はまだ登録されていない。

43 郭茂林・岡田新一・嶋富士夫「計画案 熱海ホテル」『新建築』1962 年 4 月号、pp. 148-149.

44 旧・赤尾ホテル (1956) を解体し、同設計者で新築したもの。稲葉建築事務所「赤尾ホテル」『近代建築』1956 年 8 月号、pp. 20-24; 稲葉長司設計事務所「ホテルニューアカオ メインダイニング“錦”」『建築文化』1979 年 6 月号、pp. 107-111.

4. 昭和30年代のホテル建築の特徴

4-1. 和の伝統モチーフ

飛行機の路線拡大で増加する訪日エリート外国人客を意識したこともあり、モダンと和の伝統を融合したデザインが高級ホテルを中心に好まれていた。当時の建築雑誌で紹介された和モチーフを生かした主なホテルの事例を時系列順に辿ってみる。

まず村野藤吾による志摩観光ホテル（東館1951、西館1960、本館1969）は、日本瓦葺きで、内部は漆喰の白壁に木骨が見える古民家調のデザインである。玄関ホール天井には竹が貼りつけられ、一部の客室では洋間でも窓は障子のような格子の引き戸が使用された⁴⁵。京都の比叡山中腹にあった圓堂政嘉（えんどうまさちか）（1920-1994）設計の比叡山国際観光ホテル（1959、1998年解体）は、鉄筋コンクリート造でありながら、梁桁の見せ方が日本の伝統建築の様式美を体現したものだ。ボールルーム前室の壁には京都の泰山タイルが貼られ、床は2色の大理石の乱張り（様々な大きさの石をランダムに貼る手法）で、客室の窓は障子のような棧がある引き戸を使用し、和の伝統意匠が尊重された⁴⁶。吉村順三（1908-1997）設計の箱根の「ホテル小涌園」（1959）は箱型のモダニズム建築であるものの、客室の壁紙は和のモチーフ（波、観世水、雀、橘、雪、千羽鶴）が選ばれている⁴⁷。

村野藤吾設計の京都の都ホテル（現・ウェスティン都ホテル京都）の離れ「佳水園」（1960）は、「現代風にアレンジ」された数寄屋造りの純和風建築で⁴⁸、庭には京都の「三宝院の庭からヒントをえた苔地の瓢と盃」（ひさご）が配された⁴⁹。翌年の『新建築』1961年4月号の表紙は、同じく村野藤吾が設計した都ホテル新館（1960）で飾られたが（図1：右）、このホテルの8階グリルの壁は竹材が縦に敷き詰められたり、ロビーの屋上庭園の階段には丹波石が置かれたりして、京都らしい伝統的な部材が使用されている⁵⁰。

京都・二条城前、三井家の屋敷跡の敷地に建った京都国際ホテル（1961、吉村順三、2014年解体⁵¹）も鉄筋コンクリート造のモダニズム建築であるが、ポーチの床には山口産の寒水石、1階の

45 村野・森建築事務所「志摩観光ホテル新建築」『新建築』1951年7月号、pp. 181-195.

46 円堂・富家建築設計事務所「比叡山国際観光ホテル」『新建築』1959年11月号、pp. 36-47.

47 吉村設計事務所「ホテル小涌園」『新建築』1959年12月号、p. 38.

48 浜口隆一・明石乃武「都ホテルをみて—佳水園《典雅》の造形化・過去から今日およぶ美しさ」『新建築』1960年7月号、p. 15.

49 村野・森建築事務所「都ホテルの佳水園」『新建築』1960年7月号、pp. 2-3.

50 村野・森建築事務所「都ホテル新館」『新建築』1961年4月号、pp. 13-28.

51 この跡地に2020年、HOTEL THE MITSUI KYOTO が建設された。



図3 1961年8月竣工の尖塔付き塔屋（展望室）がある京都国際ホテルの完成予想図（左）（開業当時の絵葉書より、筆者蔵）；同年3月にオープンした京都ホテル新館の相輪付きの塔屋のある完成予想図（右）（開業当時の絵葉書より、筆者蔵）

グリルの壁は松材の格子、天井は杉の網代編みの和の空間である。畳座敷の大食堂もあり、客室も3-4階は和室、他の階の洋室でも壁は聚楽サテン、窓は格子引き戸、天井は杉の網代編みとなっていて、外国人客を意識した和風の内装だった⁵²。最上階には、仏閣を彷彿とさせるデザインの展望室付きの塔屋があり、その頂上には、五重塔にあるような相輪が載ったタイプも計画にあったが⁵³、開業当時の写真を見ても相輪風の飾りは確認できず、完成予想図が描かれた当時の絵葉書や荷物タグには、別のかたち（錐形）の尖塔が載っているように描かれた（図3：左）。なお、京都国際ホテルの開業と同年、1961年3月に増築・新規オープンした老舗の京都ホテルの新館の完成予想図の塔屋部分の頂上にも仏閣風の相輪が載っているが、これも実現されなかった（図3：右）。

東京・皇居前のパレスホテル（1960-61、竹中工務店、2009年解体・新築に建て替え）も箱型のモダニズム建築であるが、随所で和の伝統要素が取り入れられている。客室の家具はベッドと応接セットの洋家具でも内装は和風となっている部屋もあり⁵⁴、外壁には信楽焼きの小口タイルが貼られ、ボールルームやロビーの天井や床には亀甲文様のモチーフが使用され、設計者によれば、「個々の感覚的な日本的要素を使うのではなく基本的な日本というものがとけこんだものとして表現するようにした」という⁵⁵。

東京・虎ノ門のホテルオークラ東京（1959-62、大成観光設計委員会・谷口吉郎・小坂秀雄・清水一・岩間旭・伊藤喜三郎、2015年本館のみ解体⁵⁶）では、創業者、大倉喜七郎（1882-1963）の

52 吉村設計事務所「京都国際ホテル」『新建築』1962年2月号、pp. 73-88.

53 上掲書、p. 81.

54 竹中工務店設計部「パレスホテル」『新建築』1961年11月号、pp. 30-31; p. 35; pp. 37-38.

55 竹中工務店「パレス・ホテル」『建築文化』1962年3月号、p. 58.

56 跡地には2019年、「The Okura Tokyo」が新築され、谷口吉郎によるロビーのインテリアが再現された。

意志「ともかくこのホテルは日本的でいこう」によって⁵⁷、外観はモダニズム建築ではあるが、壁は日本瓦貼りのなまこ壁で、庇鼻には銅板が葺かれ、エントランスの庇鼻には泰山タイルが貼られ、外壁の一部には麻の葉文様など、日本の伝統的な材料とモチーフが使われた⁵⁸。ロビーの腰壁には多胡石、その上部の屏風状の壁面は陶芸家の富本憲吉（1886-1963）による四弁花文様の西陣織となっている。宴会場ロビーの階段の壁には泰山タイルが使用され、大宴会場「平安の間」には、京都の西本願寺が収蔵する三十六歌仙の写本の継色紙をモチーフとした、^{あがたじろう} 縣治朗（1897-1982）による長大な壁面装飾があった⁵⁹。宴会場「銀杏の間」には、厳島神社が収蔵する17世紀初頭の宗達筆の平家納経の山の図柄を天然石で表現した壁があり、「暁の間」には平家納経の雲文をイメージした壁画があった⁶⁰。ホテルオークラではほかにも建築の建具やインテリアに、銀杏、蘭、竹、松、藤、菖蒲といった植物由来の和の文様や、菱、麻の葉、亀甲、鱗、網代、格子、縞といった抽象的な文様を取り入れ、日本の伝統美を随所に盛り込み⁶¹、オリンピックの年には外国人客向けに英語版テキストを添えた『日本の文様とホテルオークラ *The Indigenous Patterns and Hotel Okura*』（1964）という写真図版豊富な本で詳しく紹介された⁶²。

永田町の東京ヒルトンホテル（1963）の建設にあたっては、米ヒルトン側から建築・インテリアデザイン総監督のエマニュエル・グラン **Emmanuel Gran** が派遣され、外観は国際的なモダニズム建築であるもの、内装では和の伝統的なモチーフが重視された。客室の窓は障子のような格子と襖の引き戸で、洋室でも和を生かしたデザインになっている⁶³。和風建築を得意とする吉田五十八（1894-1974）が内装に関わっており、ロビー奥にあった数寄屋造りの「源氏の間」は源氏の紋章で装飾され⁶⁴、ロビーの独立柱は蒔絵模様となっており、このデザインの柱は、後年彼が設計した大阪ロイヤルホテル（1965、新館 1973）のロビーにも受け継がれた。

地域独自のローカルな和の伝統美を追求した例では、倉敷建築研究所こと、建築家の浦辺鎮太郎（1909-1991）が設計した倉敷国際ホテル（1963-64）があげられる⁶⁵。周囲の伝統建築と調和する倉敷らしさを重視した外観に、内部は日本の民芸をデザインに取り入れたもので、1964年に実際に泊まった建築家、西沢文隆（1915-1986）は、「外観はいつもの浦辺式デザインであるが、この倉敷では民家と一体となってもっともよく生かされている（中略）郷土として倉敷を愛し、倉

57 清水一書評「日本の文様とホテルオークラ」『新建築』1964年12月号、p. 227.

58 大成観光設計委員会「ホテルオークラ」『新建築』1962年7月号、pp. 96-97.

59 野田岩次郎；ホテルオークラ編『日本の文様とホテルオークラ *The Indigenous Patterns and Hotel Okura*』ホテルオークラ、1964年、pp. 40-45.

60 上掲書、pp. 46-47.

61 大成観光設計委員会「ホテルオークラ」『新建築』1962年7月号、pp. 94-112.

62 清水一書評「日本の文様とホテルオークラ」『新建築』1964年12月号、p. 227.

63 東京ヒルトンホテル設計部「東京ヒルトンホテル」『新建築』1963年7月号、p. 132.

64 東急ホテルチェーン編『東急ホテルの歩み』東急ホテルチェーン、1990年、p. 49.

65 栗田勇編『現代日本建築家全集 12：浦辺鎮太郎・大江宏』三一書房、1973年、pp. 40-49.



図 4 菊竹清訓設計のホテル東光園の庭側ファサード (2021 年 1 月、筆者撮影)

敷を天下の倉敷たらしめんとその都市計画を終生の私語として、打ち込んでおられる浦辺氏にしてはじめてスムーズな形で成功した」と評している⁶⁶。

佐藤武夫 (1899-1972) 設計のホテル大佐渡 (1963-64) も、その土地、佐渡島の自然環境に調和するように設計された。外装は仏閣のようなデザインモチーフで表現され、「壁体は島内の転石を務めて使用して野面積みとし」⁶⁷、内部は和風を基調とした。菊竹清訓 (1928-2011) 設計の鳥取県米子のホテル東光園は、出雲大社をモチーフにした屋根が架かり、外観にみる巨大な鉄筋コンクリートの柱の組み方は厳島神社の鳥居をイメージしたものだ (図 4)⁶⁸。

4.2. ジャパニーズ・モダンの家具

1960 年代は、ホテルに使用される家具のデザインに新機軸が訪れた時代で、ジャパニーズ・モダンの潮流を形成した数々の家具デザイナーたちが輩出された。その筆頭が剣持勇 (1912-1971)

66 西沢文隆「倉敷国際ホテルに泊って見て」『新建築』1964 年 2 月号、p. 116.

67 佐藤武夫設計事務所「ホテル大佐渡」『新建築』1964 年 12 月号、pp. 145-147.

68 湯浅和也・河田智成「東光園ホテルにおける『かた』の展開—初期作品スカイハウスとの比較を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸) 2019 年』、pp. 457-458.



図5 剣持勇の籐椅子がある現在のホテル東光園のロビー（左）（2021年1月、筆者撮影）；建設当時の同ロビーではヤコプセンのスワンチェアが置かれていた（右）（『新建築』1965年4月号、p. 131より部分）

である。彼の家具が採用されたり、彼によって内装デザインが施されたホテルは数知れない。剣持勇がホテルニュージャパン（1960、佐藤武夫、1982年焼失）のインテリアを担当したさい、メンバーに使用した丸い籐椅子が大成功を収めて以来、日本各地のホテルのロビーやラウンジが彼の丸い籐椅子で飾られるようになった（図5：左）⁶⁹。この籐椅子の下方を丸く改訂した後続モデルは、ホテル大佐渡（1963-64、佐藤武夫）のロビーで使用され⁷⁰、これが彼の代表作となったのだ⁷¹。銀座のホテル日航（1960、芦原義信）の食堂の家具も⁷²、東京ヒルトン（1963）のグリル・ルームと小宴会場の内装も剣持勇が担当した⁷³。ホテル新潟（1963、佐藤武夫）の客室の椅子も⁷⁴、熱海ガーデン（1963、丹下健三）のロビーのためにデザインされた杉の寄木の「柏戸椅子」も剣持勇の作品だった⁷⁵。1970年代も彼の活躍は続き、京王プラザホテル（1971、日本設計事務所）では、ロビーの白い六角形の椅子（図6）⁷⁶、40-41階のスイートルームの応接セットほか⁷⁷、2階グリル、3階メンバー、45階スカイバーに剣持デザインの家具が採用されている。

1960年代に活躍した著名な家具デザイナーには、東京ヒルトンのロビーの家具を担当した渡辺

69 ホテル・ニュージャパンで使用されたこの山川ラタン（1952年創業、現・ヤマカワラタン）の籐の丸椅子のモデルは「C-315-O」（1959年）であるが、他にも色々なバリエーションが制作された。松戸市教育委員会『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』東京美術、2005年、p. 11.

70 佐藤武夫設計事務所「ホテル大佐渡」『新建築』1964年12月号、pp. 150-151.

71 山川ラタン製作所のモデル「C-315-E」（1960年）。上掲書、p. 12.

72 織本匠「ホテル日航の構造について」『建築文化』1960年3月号、p. 19.

73 東京ヒルトンホテル設計部「東京ヒルトンホテル」『新建築』1963年7月号、p. 128.

74 佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟・料亭万代」『新建築』1963年11月号、p. 117.

75 天童木工のモデル「S-7165」。松戸市教育委員会『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』東京美術、2005年、p. 10.



図 6 剣持勇デザインの六角形の椅子があった京王プラザホテルのロビー（当時のホテル絵葉書より、筆者蔵）

方（1911-2013）⁷⁶、ホテル新潟のロビーの椅子や⁷⁹、東光園のスカイルーム（レストラン）のテーブル・椅子をデザインした水之江忠臣（1921-1977）⁸⁰、札幌ローヤルホテル⁸¹、堂ヶ島温泉ホテル⁸²、ホテルニューオータニの家具をデザインした村松勝男（1923-）らがいる⁸³。なお、三島由紀夫邸の設計で名を残した清水建設の建築家、銚之原捷夫（1928-2006）は、東京ヒルトンのロビーのバーと大宴会場の内装を担当している⁸⁴。

76 剣持勇の六角形の椅子の原型は、1965 年築の鴨川グランドホテルのロビーで使用されたもので、のちに三平興業が製品化し、翌 1966 年には、京都国際会館のロビーで、天童木工製の樺材の六角形の「安楽椅子 F」が置かれた。松戸市教育委員会『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』東京美術、2005 年、pp. 26-27.

77 剣持デザインのソファ（T7094BR）、安楽椅子（T7093BR）、ブラジリアンローズの木製テーブル（T6047BR）から成る。松戸市教育委員会『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』東京美術、2005 年、p. 28.

78 東京ヒルトンホテル設計部「東京ヒルトンホテル」『新建築』1963 年 7 月号、p. 128.

79 佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟・料亭万代」『新建築』1963 年 11 月号、p. 117.

80 菊竹清訓建築設計事務所「東光園」『新建築』1965 年 4 月号、p. 133.

81 「記録 7：札幌ローヤルホテル」『SD』1965 年 1 月号、p. 128.

82 ；柳建築設計事務所「堂ヶ島温泉ホテル」『新建築』1965 年 8 月号、p. 137.

83 ホテルニューオータニの家具は、他にも柴田陽三、広井力、松浦弾が担当した。「記録 118：ホテルニューオータニ」『SD』1966 年 3 月号、p. 131.

4-3. 塔屋・スカイルーム・展望レストランの設置—高みを目指し、そして宇宙へ

1964年に新築したホテル東光園のロビーには、かつてミッドセンチュリーモダンの有名デザイナーたちの家具が置かれていた。一本脚のヤコブセンの色とりどりのスワンチェアやハーマン・ミラーのテーブルで（図5：右）⁸⁵、サーリネンのチューリップチェアなど、この系統に属する近未来感あるデザインの本脚の家具も当時の日本のホテルで好まれた。たとえば、小倉日活ホテル（1963）のコーヒーショップのケーキの透明な球形のショーケースも、公衆電話を置く透明な球形のボックスも一本脚で立っているスペイシーなデザインだ⁸⁶。

1960年代の建築は、和の伝統のモチーフを使ったモダニズムだけでなく、宇宙趣味を反映した近未来的なデザインもよく取り入れられた。1961年にNASAが月への有人飛行を目指すアポロ計画を打ち出し、シアトルで開催された62年万博のシンボルタワー「スペースニードル Space Needle」は宇宙船のような形で、最上階の円盤部分は回転レストランになっているが、ここからヒントを得て、1964年、日本では2軒、円盤型の最上階が回転するタワー状のホテルが誕生した。神戸ニューポートホテルと東京・赤坂のホテルニューオータニである。3月に開業したニューポートホテルの最上15階が、日本初の回転展望レストランとなり⁸⁷、8月に開業したニューオータニでは、17階のブルースカイラウンジが回転した（図7：左）。さらにニューオータニでは、創業者の大谷米太郎（1881-1968）が「日本最大のホテル」を希望したため、「室数のうえでも今までのものより多い1500という数」が実現し、高さの点でも日本最高層（約72m）となった⁸⁸。

その後ホテルが回転展望レストランを備える事例が増えていった。横浜のホテル・エンパイア（1965）、小樽のホテル天望閣（1965）⁸⁹、広島国際ホテル（1966、現・ひろしま国際ホテル）（図7：右）、京都グランドホテル（1969、現・リーガロイヤルホテル京都）、指宿岩崎ホテル（1972）、札幌のセンチュリーロイヤルホテル（1973）、沖縄都ホテル（1974）⁹⁰、萩グランドホテル（1976、2020年閉業）と続き、ホテル・エンパイアと京都グランドホテルのもの以外は円盤状で⁹¹、宇宙

84 鈴之原捷夫は1950-60年代に、建築雑誌『国際建築』の表紙のグラフィックデザインも手掛けていた。

85 菊竹清訓建築設計事務所「東光園」『新建築』1965年4月号、pp. 130-131.

86 竹中工務店九州支店設計部「小倉日活ホテル」『新建築』1963年4月号、pp. 130-138.

87 工務株式会社・清水建設株式会社「神戸ニューポートホテル」『建築と社会』1964年4月号、pp. 11-15.

88 最終的には提携先のアメリカのシェラトンホテルの建築家ミルズの案が採用された。清水一「ホテルニューオータニの基本設計」『新建築』1964年11月号、pp. 143-144.

89 2003年にホテルノイシュロス小樽となったさいに改築され、回転レストランだった8階部分は、4部屋のスイートルームになった。

90 2018年に閉業し、ノボテル沖縄那覇になっている。

91 横浜のホテル・エンパイアは相輪も載った五重塔のようなデザインで、京都グランドホテルとともに最上階の回転レストラン部分は八角形の平面計画となっている。



図7 開業当時のホテルニューオータニ17階のブルースカイラウンジ（左）（当時のホテルパンフレットより、筆者蔵）；回転展望レストランのある広島国際ホテルの完成予想図（右）（当時のホテルパンフレットより、筆者蔵）

への憧れからスパイシーなデザインが流行った時代の証といえよう。

ともあれタワー状の回転レストランが流行する以前から、高層最上階を特別な空間として差別化する手法は、1960年代のホテル建築の特徴のひとつだった。多くのホテルが、景色を展望しながら寛げるスペースのある塔屋を最上階に設け、趣向を凝らした。かつてホテルの大食堂やラウンジは1階に置かれていたが、1960年ごろからは最上階にレストランを置き、スカイルームやスカイラウンジという名前で呼ぶようになる。建築基準法の高さ制限がまだ31mだった時代、芦原義信（1918-2003）が設計した銀座のホテル日航（1960、2014年解体）では、制限いっぱい建てた最上11階にスカイルームが設けられ、当時流行っていたジンギスカン料理を供するレストランが入っていた。高層階からの展望を楽しむのは都会に限ったことではなく、熱海の西熱海ホテル（1961、西武鉄道建築課、大成建設施工）は円筒状の近未来的な白亜のタワー型で、最上階の8階に畳敷きの大宴会場とレストランが配され、琵琶湖畔のホテル紅葉（1963、2013年解体）では、湖の景色が楽しめるよう、9階の塔屋にスカイルーム（図面では「クラブルーム」と記載）が充てられた⁹²。鴨川グランドホテル（1965）でも展望するための塔屋が設けられ、鶉飼いで知られる長良川沿いの岐阜グランドホテル本館（1973）の最上12階にあったのは「スターラウンジ」だった。このラウンジ名の接頭辞が「スカイ」ではなく「スター」とされたのも当時の宇宙好きを反映しているのだろう。鮮やかなブルーを基調とした内装には一本脚の椅子が並び、スパイシー

92 海上静一建築事務所・株式会社大末組「ホテル紅葉」『建築と社会』1964年4月号、pp. 28-31；西武鉄道建築課「西熱海ホテル」『近代建築』1961年7月号、pp. 102-105。西熱海ホテルのような円形建築のホテルは、すでに1955年に近鉄日本鉄道の依頼によって、円形建築を専門とする建築家坂本鹿名夫（1911-1987）が、奈良の生駒山に建つホテルで計画をしていた。同坂本が所属する建築総合計画研究所は、1962年にホテルが入居している鳥羽観光センターをやはり円形建築で、最上階に展望レストランを配した設計を行った。建築設計総合研究所「鳥羽観光センター」『近代建築』1962年12月号、pp. 113-117；坂本鹿名夫「円形建築について」『近代建築』1962年12月号、pp. 118-119。

な雰囲気醸し出された。このように1960年代のホテルでは、最上階にレストランやラウンジを設けることが定着してゆき、『月刊ホテル旅館』の1970年1月号は「スカイレストラン」特集が生まれ、飯坂温泉のホテル聚楽、札幌ローヤル、唐津シーサイドホテル、神戸の六甲オリエンタルホテル、日光の中禅寺ホテル、熊本のニュースカイホテル等の展望レストランが紹介された⁹³。

4-4. 広範に使用されるタイル

1960年代のホテル建築の特徴のひとつに、内外とも壁に広範な面積のタイルを貼ることによって放たれる強烈な存在感がある。陶芸の窯変によって一枚一枚色味が異なる工芸タイルが使用されるので、ファサードデザインは、このようなタイルの温かみある風合で印象が大きく左右される。磁器タイルだけでなく、ガラスブロックやホーローブロックの外壁デザイン的活用もこの時代に顕著で、増沢洵(1925-1990)設計のL字型プランのモダニズム建築の雲仙の旅館「芳仙館」(1960-61、現・雲仙スカイホテル)では、外壁に使用されたシャモットホーローブロックが、浴室部分の目隠しであると同時に装飾的に機能した⁹⁴、使用されるタイルはときに伝統工芸あるいは芸術品レベルの品質だった。森京介(1925-1992)設計の土浦京成ホテル(1963、2007年解体)では、外壁の一部に泰山タイルが使用され⁹⁵、小倉日活ホテル(1963、竹中工務店)の外壁の有田焼の磁器タイルは、鉄と石炭の町をイメージした鉄錆色が選ばれた⁹⁶。前述の札幌のホテル三愛の外壁には、美しい色とりどりのブルーを使った有田焼の青磁タイルが使われ、札幌の住宅ではこれを真似た青いタイルが流行したほどだったという⁹⁷。

タイルの積み方で菱文やモザイク模様のような効果を生む、横長の壁面を強調するファサードデザインが考案された。東京のホテルニュージャパン(1958-60、佐藤武夫)の玄関上部にある、開口部のない水平に長いファサード面では、白いタイルの配置で菱文模様がつくられ、日本各地のホテルファサードにも踏襲されている。たとえば同設計者、佐藤武夫によるホテル新潟(1963、佐藤武夫、1986年解体⁹⁸)では、エントランス部分のファサード壁面のタイルのモザイクのような積み方がホテルニュージャパンとよく似ており、4-6階の外壁は茶色の磁器タイルで一枚一枚風合いが異なっている。ホテルニュージャパンのように、玄関部分の横長ファサード面が菱文になるように貼られたタイルは、かつての水上温泉のホテル聚楽⁹⁹(現・みなかみホテルジュラク)のファサードにも見られた¹⁰⁰。

93 編集部「スカイレストラン」『月刊ホテル旅館』の1970年1月号、pp. 73-80.

94 増沢洵建築事務所「雲仙H旅館」『新建築』1962年8月号、pp. 117-121.

95 森京介建築設計事務所「京成ホテル」『新建築』1963年12月号、pp. 127-133.

96 竹中工務店九州支店設計部「小倉日活ホテル」『新建築』1963年4月号、p. 135.

97 稲葉なおと、前掲書、pp. 212-213.

98 跡地には、「ANAクラウンプラザホテル新潟」が建った。



図 8 水嶋鶴山の「壁書」がある大阪の新阪急ホテルのロビー（左）（当時の絵葉書より、筆者蔵）；篠田桃紅の書による墨象壁画があった東京のパレスホテルの特別客室（右）（当時のホテルパンフレットより、筆者蔵）

4-5. 巨大な壁面芸術

タイルは外壁だけでなく内装の壁面でも効果的に使用され、芸術的な趣向が凝らされることもしばしばだ。タイルだけに限ったことではなく、ガラス、モザイク、陶器、大理石、木材、金属など様々な素材を使って巨大な壁面芸術を作り上げ、ホテルの公共空間を飾ることが 1960 年代を中心に流行した。初期の例では、新橋の第一ホテル（本館 1938、新館 1960、清水建設、1992 年解体）のロビーには、寄木象嵌でつくられた巨大な世界地図の壁画が架けられ、1 階の大食堂の壁には抽象的なタイル画があった¹⁰¹。永田町の東京グランドホテル（1954、石川建築事務所）のロビーの壁の一面を覆ったレリーフには、ネプチューンをはじめとする海底にいる群像がある神話的モチーフが描かれていた¹⁰²。

銀座のホテル日航（1960、芦原義信、2014 年解体¹⁰³）の公共空間の壁面では、一流の芸術家たちが腕を奮った。エントランスには伊原通夫（1928-）作の大理石象嵌の抽象壁画、最上階のレストラン、スカイルームには流政之（1923-2018）による石彫積壁があり、ロビー壁面に連続して配置された襖には、篠田桃紅（1913-2021）の紺地に金の揮毫が巨大な壁画のようにデザインされた¹⁰⁴。大阪の新阪急ホテル（1963-64、竹中工務店）でも巨大な揮毫が壁面一帯を覆うインテリア

99 水上温泉のホテル聚楽は、レストラン事業で財を成し、大衆向け温泉ホテル開発にも従事した実業家、加藤清二郎（1898-1982）が 1963 年に開業させた水上聚楽に遡る。

100 水上温泉のホテル聚楽のタイル面のファサードは、2017 年までは保存されていたが、2018 年の改名リニューアルオープンの際の改修工事で失われてしまった。

101 北尾春道編『建築写真文庫 62：ホテル』彰国社、1958 年、pp. 33-34.

102 上掲書、p. 41.

103 その跡地には、2017 年、「ホテル・ザ・セレスティン銀座」が建設された。

104 芦原義信建築設計研究所「ホテル日航」『建築文化』1960 年 3 月号、pp. 12-13.



図9 東京ヒルトンのロビーを飾っていた横山操による屏風型の抽象画《富士山》(左) (『新建築』1963年7月号、p. 128より部分) と現在ザ・キャピトルホテル東急に展示されている同作品(右) (2019年8月、筆者撮影)

が採用され、ロビーと中華食堂には白楽天の詩で連なる水嶋鶴山かくざん (のち山耀さんよう) (1916-2016) の揮毫でできた壁画ならぬ「壁書」があった (図8:左)¹⁰⁵。水墨で抽象画を描く「墨象」の大家、篠田桃紅は、1960年、皇居前のパレスホテルのスイートルームの応接室にも墨象作品を制作して (図8:右)、今でも数々の高級ホテルの内部公共空間が彼女の筆による作品で飾られている¹⁰⁶。

京都国際ホテル (1961) には、箕原正みのほらただし (生没年不明) による朱を基調としたカラフルで抽象的な綴織の壁画があり¹⁰⁷、勅使河原蒼風 (1900-1979) は、熱海ガーデン (1963、丹下健三) のために、立体的で抽象的なインパクトあるモザイクタイルの壁画と彫刻を制作した¹⁰⁸。

日本画家の吉岡堅二 (1906-1990) は、ホテル新潟 (1963、佐藤武夫) の壁画として宴会場のステージに《鶴》¹⁰⁹、メインダイニングに《孔雀》を制作し、川島織物で別織したものが飾られた¹¹⁰。かつて永田町の東京ヒルトン (1963) のロビーラウンジでは、横山操みさお (1920-1973) による巨大な屏風型の抽象画《富士山》はインテリアとして機能していたが (図9:左)、今は後継ホテルのザ・キャピトル東急の廊下に美術品として展示されている (図9:右)。東京プリンスホテル (1963-

105 「記録3：新阪急ホテル」『SD』1965年1月号、p. 120；新阪急ホテル25年史編纂委員会編『新阪急ホテル25年史』新阪急ホテル、1992年、p. 38。

106 篠田桃紅は、1979年に、黒川紀章設計のブルガリア・ソフィアにあるホテル・ヴィトシャの壁画も制作し、ほかにもホテルオークラ、新宿の京王プラザホテル、ザ・ペニンシュラ東京、コンラッド東京、永田町のザ・キャピトルホテル東急、ホテルKKR金沢、パークハイアット京都などで、彼女の作品が採用されている。ギャラリーサンカイビ「Artist: 篠田桃紅 Toko Shinoda」<https://www.sankaibi.com/artists/%E7%AF%A0%E7%94%B0%E6%A1%83%E7%B4%85/> (2021年9月21日閲覧)

107 吉村設計事務所「京都国際ホテル」『新建築』1962年2月号、pp. 73-79。

108 東大丹下研究室「熱海ガーデン」『新建築』1962年3月号、pp. 86-89。

109 東京文化財研究所「吉岡堅二」<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10365.html> (2021年9月15日閲覧)

110 佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟・料亭万代」『新建築』1963年11月号、p. 115。



図10 棟方志功の板画《大世界の柵・坤（こん）—人類より神々へ》とアマン＝ジャンの絵画《ヴェネツィアの祭》が飾られていた倉敷国際ホテルのロビー（左）（当時のパンフレットより、筆者蔵）；アマン＝ジャン《ヴェネツィアの祭》（右）（1923年、油彩、大原美術館蔵）

64、竹中工務店）の1階エレベーターホールの壁画は、勝本富士雄（1926-1984）によるもので、今も大切に保存され威容を放っている¹¹¹。一方ホテルニューオータニ（1963-64）では、1階バンケットフロアのエレベーターホールに版画家の関野準一郎（1914-1988）が考案した大理石のモザイク壁画¹¹²、彫刻家の建畠覚造（1919-2006）、松本陽子（1936-）¹¹³、篠田桃紅の壁画が置かれた¹¹⁴。

神戸のオリエンタルホテル（1963-64、竹中工務店）では、彫刻家の淀井敏夫（1911-2005）制作の巨大な二つの鬼瓦《阿形》と《吽形》が1階のアップー라운ジの壁に飾られていた¹¹⁵。先にふれた札幌のホテル三愛では、特別室に藤本東一郎（1913-1998）の原画による壁面のつづれ織りがあり、1階ロビー天井のシャンデリアは多田美波（1924-2014）によるもので¹¹⁶、札幌ローヤルホテルの壁面レリーフは彫刻家の広井力（1925-）¹¹⁷の作品だ¹¹⁷。

倉敷国際ホテル（1964、浦辺鎮太郎）では、ロビーの吹き抜け部分の壁に、2層分の棟方志功

111 「記録1：東京プリンスホテル」『SD』1965年1月号、p. 116.

112 大成建設「ホテルニューオータニ」『新建築』1964年11月号、p. 163.

113 松本陽子はホテル・オークラ、ホテル・サンルート川崎などの壁画も制作した。倉敷市美術館「コレクション：松本陽子」http://www2.city.kurashiki.okayama.jp/kcam2/collection/artist_list/55.html（2021年9月21日閲覧）

114 「記録118：ホテルニューオータニ」『SD』1966年3月号、p. 131.

115 現在は、神戸メリケンパークオリエンタルホテルの正面玄関に移設されている。「記録4：オリエンタルホテル」『SD』1965年1月号、p. 122；「平和を守る『鬼瓦』、神戸メリケンパークオリエンタルホテル正面玄関に復活」『神戸経済新聞』2017年12月11日配信 <https://kobe.keizai.biz/headline/2769/>；当時の写真は：「旧『オリエンタルホテル』に設けられた鬼瓦の様子。写真＝淀井敏夫さん親族提供」『神戸経済新聞』2017年12月11日配信 <https://kobe.keizai.biz/photoflash/4270/> で見ることができる。

116 「記録6：ホテル三愛」『SD』1965年1月号、p. 126.

117 「記録7：札幌ローヤルホテル」『SD』1965年1月号、p. 128.

(1903-1975) の巨大な板画《大世界の柵・^{こん}坤—人類より神々へ》が掛けられ¹¹⁸、玄関正面の壁には、かつてフランス画家エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン Edmond-François Aman-Jean (1858-1936) の油彩の大作《ヴェネツィアの祭》(1923) が飾られていたが(図10:左)、今はホテルの隣りにある大原美術館に収蔵・展示されている(図10:右)¹¹⁹。

地方の大型ホテルでも巨大な壁面芸術は欠かせぬものだった。高松国際ホテル(1964、竹中工務店)のロビーの壁にあるレリーフは竹内清(1911-?)によるもので、東光園の客室の壁を飾った巨大な毛筆のパネルや襖紙は、グラフィックデザイナーの栗津潔(1929-2009)がデザインし、彼はホテルの色彩計画も任されていた¹²⁰。

1960年代築のホテルが今も存続していること自体が年々減っており、これらの巨大な壁面芸術は時とともに失われ、解体とともに廃棄となるか、あるいは移転して美術品扱いされて展示されてしまい、本来あった場所でインテリアとして機能し続けているものがほとんどない。1960年代当時のオリジナルの状態に残っているホテルの壁面芸術は、もはや絶滅危惧種といえる。西伊豆の堂ヶ島温泉ホテル(1964-65、柳英男設計¹²¹)のロビーに、今も岡本太郎(1911-1996)の巨大な彫刻壁画が残り、大浴場にはガラスレリーフ壁画「新宿の目」で知られる宮下芳子(生年不明-)のモザイク壁画が保存されているのは¹²²、今や希少な部類となっている。

4-6. ヴィヴィッドな色彩感覚

原色主体の派手目な色彩が組み合わされる内装は、ポップアート全盛期と重なる1960-70年代に好まれ、むしろ70年代のほうがより顕著であるが、この傾向は長きにわたっていて、1950年代の建築家たちが設計した宿のデザインにもその試みが散見される。1954年、横浜の建築家、吉原慎一郎(1908-2009)は、箱根の名門「山のホテル」の別館の設計を担当したさい、2階建ての

118 倉敷国際ホテル「歴史—倉敷国際ホテルと棟方志功」<https://www.kurashiki-kokusai-hotel.co.jp/history/> (2021年9月20日閲覧)

119 入井智靖「大原美術館 私のオススメ Episode3: エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン『ヴェネツィアの祭』」(倉敷国際ホテル公式サイト) <https://www.kurashiki-kokusai-hotel.co.jp/arts/view/3> (2021年9月20日閲覧)

120 菊竹清訓建築設計事務所「東光園」『新建築』1965年4月号、p. 134; 栗田勇編『現代日本建築家全集 19: 菊竹清訓・横文彦』三一書房、1971年、p. 222. なお東光園のロビーの照明器具は彫刻家の向井良吉(1918-2010)の作である。

121 柳英男(?-1992)は大塚常雄『建築の各部デザイン』(理工学社、1969)のなかで「ホテル旅館の意匠」という章を担当し、今でもこの建築事務所はホテル旅館を得意としているが、1950-70年代の作例では、鬼怒川温泉ホテル・増築(1957)、伊豆のあさば旅館・増改築(1957)、湯河原のゆがわら石亭・新築(1965)、日光グランドホテル・新築(1969)、諏訪湖ホテル・新築(1967)と増築(1976)、西伊豆の堂ヶ島温泉ホテル・新築増築(1972)がある。

122 柳建築設計事務所「堂ヶ島温泉ホテル」『新建築』1965年8月号、pp. 136-139; 堂ヶ島温泉ホテル「館内ギャラリー」<http://www.doh.co.jp/facilities/gallery.html> (2021年9月21日閲覧)

横に長く伸びるシンプルな箱型のモダニズム建築の外観に合うように、内装に大胆な色彩計画を試みた。カーテン、襖紙、布クロスなどの色に、モンドリアンさながら原色の赤・青・黄を使用して、「全部の質にそれぞれ相当強い色彩を持たせた言わば新しい和風色彩建築」と評されたのだ¹²³。

数寄屋建築を得意とした建築家の堀口捨己ですら、1955年に鳥取県の三朝温泉の旅館「後楽」を設計したさい、大広間（現在は玄関ロビー部分）の天井には大胆にも「色とりどりのビニールレザーを張った」という。今の天井は白一色であるが、当時の図面によれば、赤・青・黄色がランダムに配色されていた¹²⁴。この大広間の太い樫の柱の根本付近には不規則な窪みがあり朱色が塗りこめられているが、それは仕口を彩色したものである。建設当時の説明文によれば、「柱には処々その仕口の跡が出て来たがそれが極めて手の込んだ仕口なので彫刻を見るようである。その凹み色彩を加える事で、なお一きわ見所をなす」と書かれている¹²⁵。さらに、同旅館の楕円と円を組み合わせたユニークな形の浴槽のある大浴場は、「色彩の部屋である。浴槽は色モザイクタイルで、青、緑、淡紅で、床は藍と淡紅と洗出し仕上げの白」が選ばれ¹²⁶、色鮮やかに配色された空間だったようだが、この堀口デザインの大浴場は保存されていない。

白いモダニズム建築の外観のアクセントに赤色を効果的に使った例には、村田政真（1906-1987）設計の那須ホテル（1961、現在は廃墟）がある¹²⁷。設計者自身によれば、「塔屋の朱のタイル、深い庇の裏の深紅、建具、手摺などの漆黒、それらを主体の白に対比させて、明るく力強い健康性をもたしめた」という¹²⁸。ヴィヴィッドな色彩をホテル建築に使用する事例は、1960年代に一般化していった。たとえば、長崎グランドホテル（1961、清水建設、2009年解体）の「外装は色タイル張り、青、黄、ピンクのかなりはでな色彩が意識的に取り入れられ」という¹²⁹。

菊竹清訓設計のパシフィックホテル茅ヶ崎（1967、1988廃業、1998解体）では、グラフィックデザイナーの田中一光（1930-2002）が色彩計画にあたり、カラフルなレインボー・トーンをテーマとして各階ごとに色が替えられた¹³⁰。同じく菊竹設計の佐渡グランドホテル（1967、2019年閉業）でも内部の色彩計画は田中一光が担当し、外装の赤ラワン材の朱色と対比させるかのよう、

123 創和建築事務所（吉原慎一郎・岩本健吾）「山のホテル別館」『新建築』1954年2月号、p. 35.

124 堀口捨己「三朝温泉旅館後楽」『新建築』1955年6月号、p. 7.

125 上掲書、p. 18.

126 上掲書、p. 17.

127 村田政真設計のホテルには他にも、定山溪ホテルの新館・増築（1952）、霧島高原ホテル・ヒュッテ（1959）・別館（1963）、ホテル松蔵（1966）、ホテル穂高（1966）、宮崎観光ホテル（1967）、ホテル立山（1973）がある。

128 村田政真建築設計事務所「那須ホテル」『新建築』1961年9月号、p. 14.

129 清水建設福岡支店「長崎グランドホテル」『新建築』1962年8月号、p. 150.

130 菊竹清訓建築設計事務所「パシフィックホテル茅ヶ崎」『新建築』1967年2月号、pp. 143-149; 田中一光「パシフィックホテルの色彩計画」『新建築』1967年2月号、pp. 150-154.

内部の椅子のファブリックは鮮やかな青で統一された¹³¹。さらに1969年、田中一光は菊竹から赤坂東急ホテルの外装デザインも依頼され、3色の暖色ピンク・ベージュ・白のタイル張りですトライプ模様のファサードを築き、それは今も健在だ。当時は「軍艦パジャマ」と揶揄されたが、田中は、「ホテルは不特定多数の宿泊客を迎えるところで、あまり奇抜なことにはできない。しかし当時としては奇抜でありたかった」と回想している¹³²。色と部材の奇抜さでいえば、南紀白浜のホテル・ブルースカイ（1969、坂倉準三）が群を抜いていた。紫・ピンク・オレンジ・黄色の透明なプラスチック板（パラグラス）と鉄骨でできたクリスタルパレスさながらの、ポップな立方体の温室のようだったが¹³³、その夢は脆く、ほどなく閉業し今は跡形もない。

4. まとめと今後の課題

以上、東京オリンピックの開催年である1964年（昭和39年）までを目安に、主要な建築雑誌で紹介されたホテルの事例をもとに、昭和30年代のホテル建築にみられる特徴を6つあげた。1つ目は、内装を中心に和の伝統モチーフを取り入れることだが、ロビーやラウンジの大判のガラス窓から滝などを眺められるようにして¹³⁴、ホテルに付随する和風庭園を一種の巨大な壁面装飾として内装デザイン化する手法が、1960年代以降のホテルでよく行われていたが、この点については全く触れなかったのが今後の課題とする。2つ目は、当時のホテルデザインがジャパニーズ・モダンの家具の発展と歩調を合わせていたことであるが、個々の主要なデザイナーの名とその僅かな事例しかあげられなかったのが、今後はこれらのデザイナーが所属している山形県天童市の家具メーカー「天童木工」とホテルインテリアの関係についても調査が必要である。3つ目の特徴としてあげた、塔屋のスカイルームと展望レストランの発展は、当時の近未来・宇宙への憧れにも連動していて、6つ目にあげた原色主体のカラフルな色彩感覚もまたスペイシーなデザインの流行とも関係しており、これらは1970年代のホテル建築にも引き継がれる特徴なので、これについてもさらに調査しなくてはならない。4つ目にあげた特徴の、高品質な工芸タイルを広範に貼り詰めるタイプのファサードは、タイル窯変の美しい質感に頼るがあまり、総合的な外観デザインが疎かになる懸念もあり、ホテル設計の過渡期的問題点ともいえるが、ホテル・ニュージャパ

131 菊竹清訓建築設計事務所「佐渡グランドホテル」『新建築』1967年11月号、pp. 165-174.

132 田中一光『田中一光自伝：われらデザインの時代』白水社（白水uブックス1070）、2004年、pp. 136-137.

133 坂倉準三建築研究所「ホテル・ブルースカイ」『新建築』1969年7月号、pp. 195-206.

134 例えば、札幌のホテル三愛のロビーから見える庭園の滝は、北海道大学の園芸学者で造園家の明道博（1918-1988）によるデザインである。ホテル三愛設計部・坂倉準三建築研究所「ホテル三愛」『近代建築』1964年8月号、p. 114.

昭和30年代のホテル建築の特徴について

ンのような菱文やモザイク模様でつくる水平に長いエントランス上部の壁面は、当時のホテルファサードの一つの解となったため、これに類似する事例を数多く収集してゆき、ホテルの外観デザインのパターン分類と特徴を浮き彫りにしなければならない。5つ目は、一流の芸術家たちを起用して、巨大な壁面装飾を公共スペースのインテリアに大胆に取り入れる手法であるが、現存状況の確認やさらなる事例収集と製作者の特定を進め、多くのデータを集積してゆきたい。なお、モザイク壁画の流行は1960年代の公共建築全般にわたる特徴であり、本稿ではホテルロビーの事例に終始したが、温泉地の宿泊施設では大浴場のモザイク壁画の全盛期でもあったので¹³⁵、この点についても今後しっかり補足せねばならない。

本稿は主要な建築雑誌に掲載された事例に留まっているので、昭和30年代のホテル建築の特徴の僅かな片鱗をみに過ぎない。建築雑誌での紹介は著名な建築家や設計事務所の秀逸な作品に偏って選ばれるため、他の商業誌・ホテル業界誌で紹介された新築ホテルの事例の検証も加えながら、昭和30年代だけでなく、昭和40年代へも年代スパンを広げてゆき、1960-70年代に特有な日本のホテル建築のプロトタイプを体系的に明らかにしてゆく必要がある。

【謝辞】

本研究は、2021年度跡見学園後援会助成金による特別研究助成を受けて実施された研究発表の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

参考文献

- 稲葉なおと『夢のホテルのつくりかた』エクスマレッジ、2021年
- 岡田哲郎編『建築デザインシリーズ10 旅館とホテル』井上書院、1956年
- 河村英和「1960-70年代の日本のホテル建築について」『戦後昭和の建築—その価値づけをめぐる（2021年度日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門研究協議会資料）』、日本建築学会、2021年、pp. 93-98
- 北尾春道編『建築写真文庫13：旅館の客室と宴会場』彰国社1955年
- 彰国社編『建築写真文庫47：料亭・旅館の調理場』彰国社、1957年
- 北尾春道編『建築写真文庫61：旅館』彰国社1958年
- 北尾春道編『建築写真文庫62：ホテル』彰国社、1958年
- 北尾春道編『建築写真文庫65：旅館の設備』彰国社1959年

135 『近代建築』1960年8月号では、美しいモダニズム建築で建てられた雲仙の九州ホテルの大浴場が紹介され、その内壁には、抽象的な細長い縦のリーフ状模様が繰り返されているモザイク壁画が施されていた。早稲田大学武研究室「九州ホテルの浴場」『近代建築』1960年8月号、pp. 36-39。なお、北尾春道編『建築写真文庫66：温泉浴場』彰国社、1958年では、モザイク壁画のある幾つかのホテル・旅館の浴場が紹介されている。

- 北尾春道編『建築写真文庫66：温泉浴場』彰国社1958年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集2：村野藤吾』三一書房、1972年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集12：浦辺鎮太郎・大江宏』三一書房、1973年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集19：菊竹清訓・槇文彦』三一書房、1971年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集3：吉田五十八』三一書房、1974年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集7：佐藤武夫とその事務所』三一書房、1975年
- 栗田勇編『現代日本建築家全集8：吉村順三』三一書房、1972年
- 重松敦雄『ホテル物語：日本のホテル史』柴田書店、1966年
- 新阪急ホテル25年史編纂委員会編『新阪急ホテル25年史』新阪急ホテル、1992年
- 田中一光『田中一光自伝：われらデザインの時代』白水社（白水uブックス1070）、2004年
- 東急ホテルチェーン編『東急ホテルの歩み』東急ホテルチェーン、1990年
- 戸塚文子・原勉『全国ホテル案内（文春実用百科）』文芸春秋、1967年
- 富田昭次『ホテルの社会史』青弓社、2006年
- 野田岩次郎；ホテルオークラ編『日本の文様とホテルオークラ *The Indigenous Patterns and Hotel Okura*』
ホテルオークラ、1964年；1982年（改定版）
- 長谷政弘編『観光学辞典』同文館出版、1997年
- 原勉『ホテル旅行』秋元書房（トラベル・シリーズ）、1961年
- 福永満八『現代建築叢書2：旅館の建築』建設情報社、1958年
- 松戸市教育委員会『ジャパニーズ・モダン—剣持勇とその世界』東京美術、2005年
- 山脇巖『ホテル・旅館の建築設計（観光設備シリーズ 第5巻）』井上書院、1965年
- 山脇巖『ホテル・旅館の建築設計』井上書院（観光設備シリーズ 第5巻）、1965年
- 湯浅和也・河田智成「東光園ホテルにおける『かた』の展開—初期作品スカイハウスとの比較を通して」
『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）2019年』、pp. 457-458
- 和風建築社編『村野藤吾のデザイン・エッセンス5：装飾の躍動—ホテル・豪華客船』建築資料研究社、
2000年

〈雑誌記事〉（時系列順）

- 清水建設 KK 設計部「山のホテル」『新建築』1950年7月号、pp. 191-195
- 阿部允「旅館“吉野”」『新建築』1951年2月号、pp. 37-43; p. 69; p. 70
- 村野・森建築事務所「改装されたホテルマルエイ」『新建築』1951年5月号、pp. 141-147
- 近藤鉄治・懸山良雄「志摩観光ホテルの施工者として」『建築と社会』1951年7月号、pp. 21-22
- 近畿日本鐵道營繕課・村野・森建築事務所「志摩観光ホテル」『建築文化』1951年7月号、pp. 8-13; pp. 31-32
- 山脇巖「観光旅館 鳴子温泉菅原館」『建築文化』1951年7月号、pp. 14-17

昭和 30 年代のホテル建築の特徴について

- 「新建築紹介 志摩観光ホテル」『建築と社会』1951年7月号、pp. 2-5
- 「新建築紹介 ホテル マルエイ」『建築と社会』1951年7月号、pp. 6-8
- 「新建築紹介 志摩観光ホテル詳細図」『建築と社会』1951年7月号、pp. 11-13
- 竹内孝「志摩観光ホテルの企画と設備」『建築と社会』1951年7月号、pp. 14-18
- 村野藤吾「設計について」『建築と社会』1951年7月号、pp. 18-20
- 村野・森建築事務所「志摩観光ホテル新建築」『新建築』1951年7月号、pp. 181-195
- 岡田哲郎「温泉旅館“箱根武蔵野”」『建築文化』1952年3月号、p.7-14；pp. 67-72
- 竹中工務店「日活国際会館ビル」『建築文化』1952年6月号、pp. 2-8
- 竹中工務店「ホテル日活（日活国際会館）詳細図」『建築文化』1952年6月号、pp. 41-42
- 竹中工務店「日活国際会館」『新建築』1952年6月号、p. 1；pp. 252-227
- 山下壽郎設計事務所仙台支社「青木ホテル」『建築文化』1951年10月号、pp. 18-19
- 山脇巖「青木ホテル別館」『建築文化』1952年10月号、pp. 19-21
- 中村建築研究所「箱根湯本“橘旅館”」『建築文化』1952年11月号、pp. 4-6
- 中村建築研究所「箱根強羅“一福旅館”」『建築文化』1952年11月号、pp. 7-9
- 福永満八「戦後独・伊ホテル建築」『ホテルレビュー』1952年11月号、pp. 15-17
- 岡田哲郎建築設計事務所「温泉旅館“壽泉郷”」『建築文化』1953年1月号、pp. 1-7；pp. 57-58
- 福永満八「江の島海浜ホテル」『建築文化』1953年9月号、pp. 15-19
- 岡田哲郎建築事務所「羽衣ホテル」『建築文化』1953年9月号、pp. 20-23；p. 60
- 池田総一郎「柊家旅館新館」『建築文化』1953年9月号、pp. 24-26
- 滝浦潤「日本旅館とその近代化」『建築文化』1953年9月号、pp. 27-30
- 白井晟一建築研究所「秋田県I温泉ホテル増築一玄閣・会議館『浮雲』」『新建築』1953年8月号、pp. 20-25；p. 273
- 創和建築事務所（吉原慎一郎・岩本健吾）「山のホテル別館」『新建築』1954年2月号、pp. 32-36
- 十代田三郎「ホテル雑感」『近代建築』1954年9月号、p. 26
- 高橋貞太郎「帝国ホテル新館」『近代建築』1955年1月号、p. 12
- 編集部「帝国ホテル新館の設備について」『近代建築』1955年1月号、pp. 30-31
- 岡田哲郎建築設計事務所「壽泉郷」『建築文化』1955年1月号、p. 21
- 岡田哲郎建築設計事務所「武蔵野観光旅館」『建築文化』1955年1月号、pp. 22-23
- 岡田哲郎建築設計事務所「和田」『建築文化』1955年1月号、pp. 24-25
- 堀口捨己「三朝温泉旅館後楽」『新建築』1955年6月号、pp. 7-18.
- 岡田哲郎「旅館の基本計画について」『近代建築』1955年7月号、pp. 34-36
- 妹尾竜三「一王」『近代建築』1955年7月号、pp. 2-9
- 古根村勝雄「月ヶ瀬」『近代建築』1955年7月号、pp. 10-13
- 日本建築匠房「松岡」『近代建築』1955年7月号、pp. 14-17
- 河合工務店「真珠荘」『近代建築』1955年7月号、pp. 18-19

- 水間建築造園事務所「祥平館」『近代建築』1955年7月号、pp. 20-21
国土計画興業 KK「藤」『近代建築』1955年7月号、pp. 22-24
水間享之「古久屋旅館」『近代建築』1955年11月号、pp. 10-13
信建築設計事務所「旅館法華倶楽部」『近代建築』1956年1月号、pp. 8-11
相沢建築事務所「旅館 米若荘」『近代建築』1956年1月号、pp. 15-17
福永満八「猪戸館大浴室」『近代建築』1956年4月号、pp. 8-11
十代田三郎・水間享之「木村屋浴室」『近代建築』1956年4月号、pp. 12-15
吉江憲吉・鈴木悦郎「富士屋ホテル」『近代建築』1956年4月号、pp. 16-20
石間桂造・石間宏一「新小松」『近代建築』1956年4月号、pp. 21-23
水原徳言「井筒」『近代建築』1956年4月号、pp. 24-27
辻本重治・河合吉次郎「伏見屋」『近代建築』1956年4月号、pp. 28-29
福永満八「旅館の客室のプランニングについて」『近代建築』1956年4月号、pp. 30-33
稲葉建築事務所「赤尾ホテル」『近代建築』1956年8月号、pp. 20-24
鈴木如雲・小森工務店「西伊豆温泉旅館抄 三光閣」『近代建築』1956年12月号、pp. 29-30
鈴木如雲・西島工務店「西伊豆温泉旅館抄 長岡ホテル」『近代建築』1956年12月号、pp. 32-34
鈴木如雲・西島工務店「西伊豆温泉旅館抄 はなぶさ」『近代建築』1956年12月号、p. 35
鈴木如雲「西伊豆温泉旅館抄 小川屋」『近代建築』1956年12月号、p. 36
鈴木如雲「西伊豆温泉旅館抄 東府屋」『近代建築』1956年12月号、p. 37
柳建築設計事務所「旅荘・けごん」『建築文化』1957年1月号、pp. 44-48
中村登一建築研究所「旅館みなかみ」『建築文化』1957年1月号、pp. 54-57
小木曾定彰・柴岡玄佐雄「鳴子ホテル新館」『建築文化』1957年1月号、pp. 61-63
安田建設株式会社「旅館 多津美荘」『近代建築』1957年6月号、pp. 7-10
安田建設株式会社「旅館 折鶴」『近代建築』1957年6月号、pp. 11-13
水間建築造園設計事務所「旅館 古久屋別館」『近代建築』1957年6月号、pp. 20-22
水間建築造園設計事務所「旅館 松緑」『近代建築』1957年6月号、pp. 23-24
木下茂徳「旅館建築について」『近代建築』1957年6月号、pp. 25-28
近藤信夫「はなぶさ旅館」『近代建築』1957年6月号、pp. 29-31
棚橋工務店「山王ホテル」『近代建築』1957年6月号、pp. 32-33
岡田建築設計事務所「竜宮館」『近代建築』1957年11月号、pp. 21-23
日本観光 KK「旅館 玉荘」『近代建築』1957年11月号、pp. 26-27
日本観光 KK「富士屋ホテル新館」『近代建築』1957年11月号、pp. 28-29
岡田建築設計事務所「海浜の施設と旅館 竜宮館」『近代建築』1957年11月号、pp. 21-23
柴岡玄佐雄「庭の中の浴場—東光園新浴場」『建築文化』1958年5月号、pp. 35-38
柴岡玄佐雄「池の面した離れ」『建築文化』1958年5月号、pp. 39-41
岡田哲郎建築設計事務所「濤泉郷」『建築文化』1958年5月号、p. 42

昭和30年代のホテル建築の特徴について

- 戸田組設計課「旅館いろは 福井県芦原」『建築文化』1958年5月号、pp. 46-49
- 大成建設設計部「熱海・八方苑」『建築文化』1958年5月号、p. 50
- 大成建設株式会社設計部「熱海富士屋ホテル特別室」『建築文化』1958年5月号、pp. 57-59
- 大成建設株式会社設計部「熱海富士屋ホテル大宴会場」『建築文化』1958年5月号、pp. 58-60
- 西武観光設計部「湯の花ホテル」『近代建築』1958年9月号、pp. 56-57
- 高橋建築事務所「帝国ホテル」『近代建築』1958年10月号、pp. 52-55
- 高橋建築事務所「帝国ホテルの設備」『近代建築』1958年10月号、pp. 65-65
- 荻野富雄・荘司建設KK「若葉ホテル」『近代建築』1958年12月号、pp. 58-59
- 村田政真建築設計事務所「霧島高原ホテル・ヒュッテ」『新建築』1959年8月号、pp. 25-34
- 柳建築設計事務所「鬼怒川温泉ホテル」『建築文化』1959年10月号、pp. 33-37
- 山脇建築研究室「ホテル白河新館と独立浴場」『建築文化』1959年10月号、pp. 38-41
- 山脇建築研究室「川治温泉ホテル」『建築文化』1959年10月号、pp. 42-46
- 池亀暢雄「待月楼」『建築文化』1959年10月号、pp. 47-50
- 円堂・富家建築設計事務所「比叡山国際観光ホテル」『新建築』1959年11月号、pp. 36-47
- 吉村設計事務所「ホテル小涌園」『新建築』1959年12月号、pp. 2-38
- 芦原義信建築設計研究所「ホテル：日航」『近代建築』1960年3月号、pp. 25-41
- 白浜謙一「旅館：桃李郷」『近代建築』1960年3月号、pp. 42-48
- 毛利建築設計事務所「ホテル：宝家」『近代建築』1960年3月号、pp. 49-53
- 佐藤守男「旅館：たばこや」『近代建築』1960年3月号、pp. 54-57
- 二階堂辰彦「海外に於けるホテルの現況」『近代建築』1960年3月号、pp. 67-71
- 明石信道「建築計画の方法—II ホテル・旅館の性格分類」『近代建築』1960年3月号、pp. 72-73
- 芦原義信建築設計研究所「ホテル日航」『建築文化』1960年3月号、pp. 5-18
- 織本匠「ホテル日航の構造について」『建築文化』1960年3月号、pp. 18-19
- 犬塚恵三「ホテル日航の設備について」『建築文化』1960年3月号、pp. 21-22
- 岩下秀男「ホテル日航の外壁のカーテンウォールについて」『建築文化』1960年3月号、pp. 23-24
- 坂倉準三建築研究所「白馬東急ホテル」『建築文化』1960年3月号、pp. 25-31
- 竹中工務店設計部「湖畔のホテル」『建築文化』1960年3月号、pp. 32-36
- 犬丸徹三「対談・ホテルも公共建築」『公共建築』1960年3月号、pp. 12-17.
- A.R. ソーレンセン・大成建設設計部「計画案：インドネシアホテル」『新建築』1960年5月号、pp. 44-46
- 村野・森建築事務所「都ホテルの佳水園」『新建築』1960年7月号、pp. 2-14
- 浜口隆一・明石乃武「都ホテルをみて—佳水園《典雅》の造形化・過去から今日およぶ美しさ」『新建築』1960年7月号、pp. 15-16
- 早稲田大学武研究室「九州ホテルの浴場」『近代建築』1960年8月号、pp. 36-39
- 山下寿郎設計事務所「箱根観光ホテル」『近代建築』1960年8月号、pp. 64-68
- 村野・森建築事務所「都ホテル新館」『新建築』1961年4月号、pp. 13-28

- 清水建設設計部「ホテルさがみや」『新建築』1961年4月号、pp. 29-34
- 西武鉄道建築課「西熱海ホテル」『近代建築』1961年7月号、pp. 102-105
- 村田政真建築設計事務所「那須ホテル」『新建築』1961年9月号、pp. 13-25
- 掘田英二建築設計事務所「大洗パークホテル」『建築文化』1961年10月号、pp. 95-100
- 竹中工務店設計部「パレスホテル」『新建築』1961年11月号、pp. 29-40
- 吉村設計事務所「京都国際ホテル」『新建築』1962年2月号、pp. 73-88
- 岩下秀男・犬塚恵三「ホテル経営と建築生産を結ぶもの コストプランニングのためのスタディ」『建築文化』1962年3月号、pp. 35-46
- 丹下健三計画研究室「ホテル・熱海ガーデン」『建築文化』1962年3月号、pp. 47-56
- 竹中工務店「パレス・ホテル」『建築文化』1962年3月号、pp. 57-62
- 「ピッツバーグ・ヒルトン・ホテル」『建築文化』1962年3月号、pp. 63-67
- 「クイーン・エリザベス・ホテル」『建築文化』1962年3月号、pp. 68-72
- 「完成またれるホテル・オークラ 協同設計の成否は」『建築文化』1962年3月号、pp. 73-75
- 柴田陽三「ホテル・オークラ建設のためのチェック 欧米のホテルを回って」『建築文化』1962年3月号、pp. 76-77
- 吉村設計事務所「京都国際ホテル」『建築文化』1962年3月号、pp. 78-80
- 東大丹下研究室「熱海ガーデン」『新建築』1962年3月号、pp. 83-95
- 郭茂林・岡田新一・嶋富士夫「計画案 熱海ホテル」『新建築』1962年4月号、pp. 148-149
- 吉江憲吉設計事務所「山中湖ホテル計画案」『新建築』1962年4月号、p. 151
- 大成観光設計委員会「ホテルオークラ」『新建築』1962年7月号、pp. 94-112
- 「ホテル・オークラのデザイン」『近代建築』1962年7月号、pp. 29-48
- 増沢洵建築事務所「雲仙H旅館」『新建築』1962年8月号、pp. 117-121
- 清水建設福岡支店「長崎グランドホテル」『新建築』1962年8月号、pp. 150-151
- 岸本建築設計事務所「ホテル国富」『建築文化』1962年10月号、pp. 98-102
- 竹中工務店「六甲山ホテル新館」『近代建築』1962年12月号、pp. 105-112
- 建築設計総合研究所「鳥羽観光センター」『近代建築』1962年12月号、pp. 113-117
- 坂本鹿名夫「円形建築について」『近代建築』1962年12月号、pp. 118-119
- 与田建築設計事務所「溪雲荘ホテル」『近代建築』1962年12月号、pp. 120-123
- A・ソーレンセン・大成建設設計部「ホテルインドネシア」『新建築』1963年1月号、pp. 87-102
- 信建築設計事務所「美ヶ原高原ホテル」『新建築』1963年3月号、pp. 180-184
- 竹中工務店九州支店設計部「小倉日活ホテル」『新建築』1963年4月号、pp. 130-138
- 村田政真建築設計事務所「霧島高原ホテル別館」『新建築』1963年5月号、pp. 115-123
- 東京ヒルトンホテル設計部「東京ヒルトンホテル」『新建築』1963年7月号、pp. 124-132
- 村野・森建築事務所「名古屋都ホテル」『新建築』1963年11月号、pp. 101-110.
- 佐藤武夫建築設計事務所「ホテル新潟・料亭万代」『新建築』1963年11月号、pp. 111-124

昭和30年代のホテル建築の特徴について

- 森京介建築設計事務所「土浦京成ホテル」『近代建築』1963年12月号、pp. 85-96
- 森京介建築設計事務所「京成ホテル」『新建築』1963年12月号、pp. 127-133
- 倉敷建築研究所「倉敷国際ホテル」『近代建築』1964年2月号、p. 51
- 二川幸夫「倉敷国際ホテルを撮影して」『近代建築』1964年2月号、pp. 52-69
- 倉敷建築研究所「倉敷国際ホテル」『新建築』1964年2月号、pp. 99-112
- 松村慶三「ホテルの計画と設計」『新建築』1964年2月号、pp. 113-114
- 西沢文隆「倉敷国際ホテルに泊って見て」『新建築』1964年2月号、pp. 115-116
- 村松貞次郎「ホテルの計画と設計」『新建築』1964年2月号、p. 113
- 草野建築事務所「ホテル・白雲山荘」『近代建築』1964年4月号、pp. 55-60
- 志賀設計株式会社「日名子ホテル」『近代建築』1964年4月号、pp. 61-66
- 岡田の場建築事務所「虹の松原ホテル」『近代建築』1964年4月号、pp. 73-76
- 日建設計工務株式会社・清水建設株式会社「神戸ニューポートホテル」『建築と社会』1964年4月号、pp. 11-15
- 倉敷建築研究所・株式会社藤木工務店「倉敷国際ホテル」『建築と社会』1964年4月号、pp. 16-19
- 株式会社竹中工務店「宝塚ホテル」『建築と社会』1964年4月号、pp. 20-23
- 株式会社竹中工務店「六甲山ホテル新館」『建築と社会』1964年4月号、pp. 24-27
- 海上静一建築事務所・株式会社大末組「ホテル紅葉」『建築と社会』1964年4月号、pp. 28-31
- 若山麓「ホテル建築について」『建築と社会』1964年4月号、pp. 34-35
- 川名敏次郎「ホテル・マネーギャから」『建築と社会』1964年4月号、p. 36
- 小倉克己「ホテル建築について」『建築と社会』1964年4月号、p. 37
- 清水一「ホテルについて」『建築と社会』1964年4月号、p. 38
- 永井賢城「ホテルと建築」『建築と社会』1964年4月号、p. 39
- 村田政真「観光ホテル寸感」『建築と社会』1964年4月号、pp. 40-41
- 滝浦潤「ホテルの今後」『建築と社会』1964年4月号、pp. 43-46
- 吉成武「〈ホテル東京オータニ〉の設計とその問題点」『公共建築』1964年4月号、pp. 65-67
- ホテル三愛設計部・坂倉準三建築研究所「ホテル三愛」『近代建築』1964年8月号、pp. 108-120
- 林幸二郎「オリンピックとホテル」『建築と社会』1964年9月号、pp. 54-55
- 清水一「ホテルニューオータニの基本設計」『新建築』1964年11月号、pp. 143-144
- 北村隆夫「新阪急ホテルの設計について」『新建築』1964年11月号、pp. 145-146
- 竹中工務店「新阪急ホテル」『新建築』1964年11月号、pp. 147-156
- 大成建設「ホテルニューオータニ」『新建築』1964年11月号、pp. 157-166
- 柴田陽三・蒲生恵一「ホテルにおける企画と設計」『新建築』1964年11月号、pp. 170-179
- 「日本の都市ホテル16」『新建築』1964年11月号、pp. 180-198
- 光安義光「今月の建築 志んぐ荘」『近代建築』1964年12月号、pp. 147-150
- 東急不動産設計監理部「今月の建築 羽田東急ホテル」『近代建築』1964年12月号、pp. 151-156

- 野老設計事務所「今月の建築 ホテル井筒」『近代建築』1964年12月号、pp. 157-162
- 佐藤武夫設計事務所「ホテル大佐渡」『新建築』1964年12月号、pp. 145-157
- 清水一書評「日本の文様とホテルオークラ」『新建築』1964年12月号、p. 227
- 「記録1：東京プリンスホテル」『SD』1965年1月号、pp. 116-117
- 「記録2：川崎日航ホテル」『SD』1965年1月号、pp. 118-119
- 「記録3：新阪急ホテル」『SD』1965年1月号、pp. 120-121
- 「記録4：オリエンタルホテル」『SD』1965年1月号、pp. 122-123
- 「記録5：姫路新大阪ホテル」『SD』1965年1月号、pp. 124-125
- 「記録6：ホテル三愛」『SD』1965年1月号、pp. 126-127
- 「記録7：札幌ローヤルホテル」『SD』1965年1月号、pp. 128-129
- 菊竹清訓建築設計事務所「東光園」『新建築』1965年4月号、pp. 115-138
- 土井鷹雄「ホテル東光園に求めたもの」『新建築』1965年4月号、p. 129
- 柳建築設計事務所「堂ヶ島温泉ホテル」『新建築』1965年8月号、pp. 131-140
- 「記録68：草津温泉のホテル・サンバレー」『SD』1965年9月号、p. 141
- 「記録69：鴨川グランドホテル」『SD』1965年9月号、p. 142
- 「記録70：三保園ホテル 田中忠雄建築設計事務所」『SD』1965年9月号、p. 143
- 「記録71：ホテル・マウント富士」『SD』1965年9月号、p. 144
- 「記録72：高松国際ホテル 竹中工務店」『SD』1965年9月号、p. 145
- 「記録73：アサマ・モーターロッジ」『SD』1965年9月号、p. 146
- 「記録74：鬼首高原荘」『SD』1965年9月号、p. 147
- 「記録75：グランスパ―長島温泉」『SD』1965年9月号、p. 148
- 「記録118：ホテルニューオータニ」『SD』1966年3月号、p. 131
- 菊竹清訓建築設計事務所「パシフィックホテル茅崎」『新建築』1967年2月号、pp. 143-149
- 田中一光「パシフィックホテルの色彩計画」『新建築』1967年2月号、pp. 150-154
- 辻野純徳「倉敷国際ホテル他」『建築と社会』1967年11月号、p. 48
- 菊竹清訓建築設計事務所「佐渡グランドホテル」『新建築』1967年11月号、pp. 165-174
- 坂倉準三建築研究所「ホテル・ブルースカイ」『新建築』1969年7月号、pp. 195-206
- 編集部「スカイレストラン」『月刊ホテル旅館』の1970年1月号、pp. 73-80
- 稲葉長司設計事務所「ホテルニューアカオ メインダイニング“錦”」『建築文化』1979年6月号、pp. 107-111

〈新聞記事〉

- 「旧『オリエンタルホテル』に設けられた鬼瓦の様子。写真＝淀井敏夫さん親族提供」『神戸経済新聞』
2017年12月11日配信 <https://kobe.keizai.biz/photoflash/4270/> (2021年9月21日閲覧)

昭和 30 年代のホテル建築の特徴について

「平和を守る『鬼瓦』、神戸メリケンパークオリエンタルホテル正面玄関に復活」『神戸経済新聞』2017 年 12 月 11 日配信 <https://kobe.keizai.biz/headline/2769/> (2021 年 9 月 21 日閲覧)

参考サイト

入井智靖「大原美術館 私のオススメ Episode3：エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン『ヴェニス
祭』」(倉敷国際ホテル公式サイト) <https://www.kurashiki-kokusai-hotel.co.jp/arts/view/3> (2021 年 9 月 20 日閲覧)

鴨川グランドホテル「鴨川グランドホテルについて」<https://www.kgh.ne.jp/04/concept/> (2021 年 9 月 17 日閲覧)

ギャラリーサンカイビ「Artist: 篠田桃紅 Toko Shinoda」<https://www.sankaibi.com/artists/%E7%AF%A0%E7%94%B0%E6%A1%83%E7%B4%85/> (2021 年 9 月 21 日閲覧)

京都ホテルグループ「写真・年表に見る京都ホテル 100 年の歩み」https://www.kyotohotel.co.jp/history/chapter_06/ (2021 年 10 月 6 日閲覧)

倉敷国際ホテル「歴史—倉敷国際ホテルと棟方志功」<https://www.kurashiki-kokusai-hotel.co.jp/history/> (2021 年 9 月 20 日閲覧)

倉敷市美術館「コレクション：松本陽子」http://www2.city.kurashiki.okayama.jp/kcam2/collection/artist_list/55.html (2021 年 9 月 21 日閲覧)

三朝温泉後楽公式サイト「後楽 6 つの魅力」<http://www.misasa-kouraku.co.jp/miryoku.html#miryoku02> (2021 年 9 月 18 日閲覧)

堂ヶ島温泉ホテル「館内ギャラリー」<http://www.doh.co.jp/facilities/gallery.html> (2021 年 9 月 21 日閲覧)

東急ホテルズ「彩りを添える芸術作品：ザ・キャピトルホテル 東急を照らす作品の数々」<https://www.tokyuhotels.co.jp/capitol-h/artworks/index.html> (2021 年 10 月 6 日閲覧)

東京文化財研究所「吉岡堅二」<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10365.html> (2021 年 9 月 15 日閲覧)

日本航空「JAL の沿革」<https://www.jal.com/ja/outline/history.html> (2021 年 9 月 20 日閲覧)

箱根・山のホテル「山のホテルの歴史」<https://www.hakone-hoteldeyama.jp/history/> (2021 年 9 月 17 日閲覧)

八勝館「お部屋」<https://www.hasshoukan.com/room/> (2021 年 9 月 18 日閲覧)

柳建築事務所の商業施設作品リスト、http://www.y-a.co.jp/play_p.html (2021 年 9 月 16 日閲覧)

柳建築事務所「会社案内」、http://www.y-a.co.jp/info_p.html (2021 年 9 月 16 日閲覧)

ヤマカワラタンのオフィシャルサイト <https://www.yamakawa-rattan.co.jp/> (2021 年 9 月 17 日閲覧)